

學校環境の美化と植樹

水 島 ヒ サ

思いも遙かに遠い女学生の頃、私の母校の校庭には亭々と聳える楡の大樹があつた。いつばいに枝を拡げて五月の天空に若葉をゆるがせていたあの楡の木。テニスに疲れて憩つた樹蔭。幾度か増築して校庭も狭められたが、代々の校長は楡の木を伐らなかつたし、私共の心もあの木に連なつていた。沙翁の生家の庭園にも大きな楡の木が屋根を覆うくらい茂つていたと知つて、私共の胸は一層ロマンチックにふくらんで、理想を夢見たり、詩を語つたり、限らない情趣にひたつた。

玄関の中央にはオンコの木が伸びていた。卒業後校舎を訪れるたびに黙々と迎えてくれるオンコの樹。写真の背景はきまつてオンコか楡の樹であつた。

六年間御世話になつた小学校には何の木も花もなく、殺風景なカサカサ乾からびた校庭であつただけに、樹木と花卉に恵まれた女学校生活は心もしみじみと楽しかつたのかも知れない。

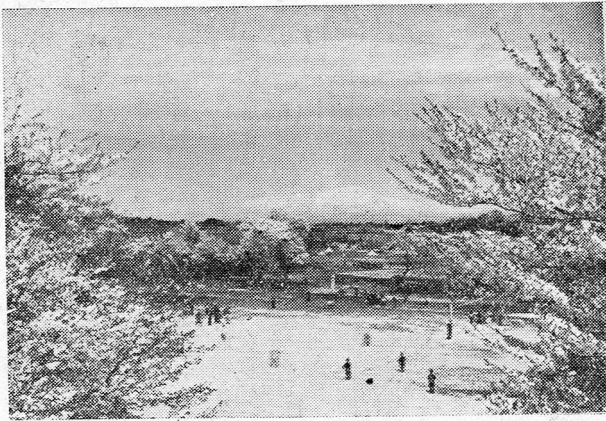
生家に一本の杏があつた。私の生まれる年にまだ幼くて可愛い盛りを病死した私の兄の形身として、母は殊に大切にしていた。縁側から捨てた杏の種が偶然生えて、毎年毎年伸びひろがつて、晩春初夏の候には雪のように真白な花を豊かにつけた。

物心つてから二度移転したが、そのたびに、この杏の木は引越荷物のトップだつた。

今では二階の屋根を遙かに越して、花盛りの頃は、一町も先から目立つて、実家を訪れる途次の嬉しい眺めとなつた。

すでに四十年以前のこと、或る高貴の方の御来道を迎えて、御滞在中の御慰めに、丁度花の乏しい時節であつたので、ある生花商が庭の杏の目醒めるばかりの純白の花に眼をつけて、しやにむに少々きらせて欲しいとやつてきた。学校から帰つて、殆ど丸裸に切られてしまつた杏の木をみて、木が可哀そうで、枯れてしまふといつて妹達と泣いたことを思い出す。

また、一坪ずつの花壇を父に貰つて、四季折々の種を植え、花を咲かせ、思う存分



桜花に包まれた楽しい校庭

工夫をこらしたたのしきは、何時の日か忘れられよう。
幸い住居は植物園の近くであつたから、まだ枯れなかつた榎松林に郭公もきたし、稀にはホトトギスの帛を裂く声もきいた。今は町の繁華街近く、一本の街路樹もない通りに面して暮しているの、樹木に囲まれない生活の寂しさを身にしみている。

私はここ二年ばかり、地方の学校を訪れる機会に恵まれた。

田舎道の遠くから、目指す学校が、こんもりと樹木に包まれているのは、嬉しいもの一つである。

粗末な校舎もよく掃除が行届いて、庭には心づくしの木や花が自然の生命を力いつばい伸ばしたり咲かせたりしている中に学ぶ児童は、豊かな情操も知らず知らず養われることだろう。

道南のある村に父兄が一木ずつもちよつてつくつたという公園のように美しい校庭があつた。遠くの丘を遠景に、近くの爽つた田畑を中景に、そして校庭の樹木のたたずまいを近景に、あたかも絵のような学校であつたが、そこに学ぶ児童の頬は赤く、

瞳は輝いていた。

これに反して、新しい校舎でも、校庭に木がなく、いかにもさびざむとしていた所では、心までひからびて、温かさを失うような気がする。

かつて日光を旅して、一番印象に残つたのは、杉並木であつた。真直くに天を指す幾抱えもある杉の並木の見事さ。

江戸時代初期日光廟の出来る頃、各大名は石燈籠その他の献上品に贅をつくし、豪華を競つたとき、貧しい一大名が杉の苗木を幾本も献じて街道に植えたのが今日の杉並木の由来である。

どんな立派な物質でも、幾星霜を経れば崩れ落ちてしまふが、生きた杉の苗木は、年と共に年輪を重ねて、人工の美の極致にもまさる自然の壮麗な美しさをそそつていく。

子供の心にうるおいと自然に対するやさしい愛をしみじみと養うのには、学校の環境を植樹によつて美化することが大切だとおもう。四季とりどりに姿を変えて、素直につつましく生きる樹木から、自然の摂理を学ばせたい。しかも植物は何処にも根をおろす。磐岩の裂目にも砂丘にも、しつかりとたくましく花をつけている。

私は記念事業には植樹を一番いいとおもう。育てるたのしみに加えて、年と共に風情を増し、後に来る者にも限らない愛情を伝えるから。

私は北海道のあらゆる学校が、それぞれの地域にふさわしいとりどりの樹木に囲まれて、緑の学校、紅葉の校庭となることを祈つてやまない。

(筆者は北海道教育委員会委員長)